

譯注

董康『書舶庸譚』九卷本譯注（二）

芳村弘道

〔書舶庸譚卷五 民國二十二年（昭和八年、一九三三年、癸酉）十一月二十二日～三十日〕

二十二日

晴れ。武昌の吳仲常^{〔1〕}の手紙を受け取る。「ポーランド刑法」は昭和八年の「法學論叢」に分載されている由で、ついでの折りに御購讀されたし、とのこと。无恙は錫堂とともに元箱根に出かけた。小林〔忠次郎〕が京都から到着。各書の影印について話す。これから人の驚く祕籍を世間に普及させることとなり、余の宿願が叶って心が大きいに慰められた。晩に田中〔慶太郎〕夫婦が來談。

（1）『民國職官年表』頁一三〇一によると、吳學義、字は仲常といい、江西省南城縣の人。國民黨政府の立法院立法委員に任ぜられた（同書頁四〇八に四五年二月三日任とする）。

（2）「法學論叢」は京都帝國大學法學會から發行された雑誌であるが、その昭和八年には「ポーランド刑法」に相當するものを見ない。これは「法學協會雜誌」昭和八年の第五一卷下第一二號と九年の第五二巻上

第一號に掲載された菊井維大「ポーランド強制執行法概説」（一）（二）を指すのであろう。

二十三日

晴れ。无恙が熱海から戻る。今回の旅行は元箱根が楽しかったとのこと。午後一時、學士院に行き講演を行う。「東京帝國」大學教授の小野博士（小野清一郎）に會う。博士は刑法學で有名。余は刑法の新傾向を質問する。彼は「刑法は歴史から見ではじめて根據を有する」といった。これは余の「溫故知新」の説に深く合致するところがある。小林來談。引き留めて共に夕食をとる。景熙が余にアメリカのメロン一個を贈ってくれる。値段が二圓と聞いて、そのまま小林の土産にした。

二十四日

晴れ。大谷（未詳^{〔1〕}）がやってきて別れを告げる。本日中に上海に歸るつもりである。午後、雨。晩、无恙と逸齋を連れて、劉爲章（未詳）

主催の陶陶亭(日比谷にあった中華料理店)の宴會に行く。公使館の孫伯醇・陸軍學生監督の唐天閑(未詳)、および龔玉徽・吳夫人・姪おひの景熙・その姉、主客十人が同席。

(1) 王君南氏整理本の索引が「大谷禿庵上人」と同一人として列するのは誤りであろう。なお巻六・十二月五日・二十三日條に明治大學教授「大谷美隆」を見るが、あるいはこの人か。

二十五日

晴れ。午後三時、「田中」乾郎君が私たちを案内してくれて、高田馬場に行き劉爲章を訪問。招待の御禮を述べる。續いて明治神宮外苑に行く。青山練兵場を改造したものである。神宮の形式はフランスのベルサイユを模倣しており、竝はずれた廣さである。樹木は震災後に新たに植られた。青山離宮が直ぐ近く。大正天皇が皇太子であった時の青山御所である。それゆえ皇太后がまだここにおられる。夕暮れに宿に歸る。伯醇が来て、无恙と合作の繪を一幅、余にくれる。これも今回の日本旅行の記念となる。

二十六日

雨。午後六時、平尾贊平が我々を招待してくれ、萬安樓(銀座一丁目にあった料亭)の夜宴に赴く。席には平尾の會社の顧問二人、勝山岳陽と彼の子息がいた。平尾が一番遅くやってきた。贊平は押し出しが立派な風采で、古錢収集の趣味があり、それで「聚泉」と號してい

る。拓片集二冊を取り出した。また壯泉の範(王莽の新時代の貨幣「壯泉三十」の型)を模して「聚泉三十」を作り、客人への記念品にした。萬安樓の藝者は芝區の紅葉館(1)と肩を竝べ、昔から江戸(マ)の散財場所になつてゐる。ごちそうには海産物が多い。酒宴半ばにして唐人の歌舞が演じられた。緩やかにまた聲低に歌われた曲には、「四君子(清元)」「わが春?(原文「我之青春」)」「松の緑(長唄)」などという題があつた。金扇をもち長い裾を引き、雲鬢羅襪(つぶし島田)に白足袋)のいでたち。たおやかな姿は、錢舜舉の「仕女圖」(2)中に求めるのにふさわしい。同じ娛樂でも、今流行の腕を出し、胸を開けた洋装の女給とは、はつきりと雅俗の違いがある。そうこうするうち、主人は寫眞師を呼んで記念寫眞を撮つた。无恙は素晴らしい滅多にない機會と、藝者に各人の名前を書かせ、劉晨・阮肇(3)よろしく遊治郎再來の下準備とした。藝者達は恥ずかしそうに命に應じた。なかに楷書が上手な者もいた。ある藝者の名は、鈴、甲子、大黒貞子といい、なんと三つの姓を上につけている(文意未詳)(4)。「唐の」平康坊の妓女が養母(置屋の女將)の姓氏を名乗つたが、こうした風習は中日相同じである。十時に宿に歸る。しとしとと雨の音が夜通し續く。

萬安樓艶集贈平尾聚泉 萬安樓の艶集にて平尾聚泉に贈る

〔其一〕 〔其の一〕

歌樓遺譜溯三哥(5) 歌樓の遺譜は三哥に溯る

【原注：歌樓格爲明皇飭供奉所譜、附見徐子室南曲譜(7)(歌樓格は明皇、供奉に飭ちかして譜する所と爲す。徐子室の南曲譜に

附見す)】

夢入連昌劫屢過 夢に連昌に入れば劫屢しば過ぐ
一曲云謠誰省得 一曲の云謠 誰か省し得たる

【原注：云謠集凡三十二闕、皆唐人曲調、燉煌殘卷、今存英倫博物院（云謠集は凡て三十二闕、皆唐人の曲調なり。燉煌

の殘卷は、今、英倫博物院に存す）】

笑他胡舞習天魔 他かの胡舞の天魔に習ふを笑ふ

〔其二〕

競寫芳名筆格妍 競うて芳名を寫して筆格は妍なり

吾妻月色照瓊筵 吾妻の月色 瓊筵を照らす

聞歌驚觸青春感 歌を聞いて驚にはかに青春の感に觸る

紅葉題襟已卅年 紅葉の題襟 已に卅年

【原注：最初航渡與沈子培諸公餽詠於芝區紅葉館、距今閱三十年矣（最初の航渡、沈子培の諸公と芝區の紅葉館に餽詠す。今を距つること三十年を閲せり）】

萬安樓での綺麗どころを揚げての宴會にて平尾聚泉に贈る

〔其の一〕

古來傳わる「歌樓格」の曲譜の源は三哥（と呼ばれた唐の玄宗）に溯る。【原注：「歌樓格」は唐の明皇帝玄宗が供奉の者に敕命して作らせた曲譜である。徐子室の『南曲譜』に附録されている。】連昌宮に入って「遊んで歸ると、幾劫もの長い年月が過ぎていた夢を見る「かのように、今宵の宴會は華やかで、時の經つのを忘れる」。「藝者が唐人の歌舞を行ったが、」唐代の「雲謠集」の一曲をだれが記憶していたのだろうか。【原注：「雲謠集」は全部で

三十二首。すべて唐人の歌謠である。敦煌の殘卷がイギリスのロンドン博物館に現存する。】天魔舞を習った異民族の元人の舞いなどは、お笑いぐさである。

〔其の二〕

【藝者が】競うように名前を書いてくれたが、優美な筆跡であった。吾妻あづまの地に輝く月光が華麗な宴會を照らす。歌聲を聞いて急に青春の頃が思い出された。紅葉館での唱和は、もう三十年も前のこと。【原注：初めて渡航した時、沈子培氏らと芝區の紅葉館で詩酒の宴をもった。今より三十年も昔のことである。】

(1) 明治十四年（一八八一）創業の高級和風の大規模料亭。昭和二十年の大空襲で焼失し、跡地に東京タワーが建つ。

(2) 錢選、字は舜舉、號玉潭。浙江吳興の人。宋末・元初の畫家、詩人。【圖繪寶鑑】卷五・【畫史彙傳】卷一八などに傳が見える。「仕女圖」の傳世品の一つに臺灣故宮博物院藏の「招涼仕女圖」がある。

(3) 後漢の永平年間（五八〜七五）、劉晨・阮肇の二人は天台山に藥草を取り入って、道に迷って二仙女に會い、半年の滞在後もどると、七世代後の晉の時代に變わっていた。のち天台山を再訪したが、跡形なかったという（劉宋の劉義慶『幽冥錄』）。後世この故事に因んで、男女の忍び逢いの意味に用いることがある。なお色街を女仙の世界に喩え、客を「劉郎」と呼ぶことが多い。

(4) 原文は「一姬名鈴甲子大黒貞子、乃冠以三姓」。「一姬」すなわち一人の藝者に姓が三つもあるというのであろうが、「鈴甲子大黒貞子」のうち、どれが「三姓」か解しがたい。あるいは源氏名と本姓名との二つを聞いたのを誤解したもののか。

(5) 唐の花街は長安の平康坊にあった。當時の様子が唐の孫棨『北里志』に記録され、それに「妓の母は假母多し。……皆假母の姓を冒す」

とある。

(6) 唐の玄宗は排行(兄弟従兄弟の長幼の順序)が第三であったので、「三郎」「三哥」の別稱がある。『舊唐書』卷一〇七に玄宗第四子の棣王琰が父を指して「惟だ三哥のみ其の罪人を辯ず」といった例を見る。

(7) 「明皇」は唐の玄宗を諡號(正式には「至道大聖大明孝皇帝」)で呼んだもの。「徐子室南曲譜」は明の徐慶卿(字子室)編・清の鈕少雅訂になる南戲の曲譜集『彙纂元譜南曲九宮正始(九宮正始)』のこと。ただし該書に冠する芍溪老人(鈕少雅)の自序や馮旭の序によれば、『歌樓格』を入手したのは鈕少雅本人である。少雅が王某の書架に『歌樓格』を見出し、これを尋ねた王の答を自序に記し、「此の書は、漢の武帝及び唐の玄宗の曲譜なり。……上古名づけて骷髏格と曰ふ。漢に至り易へて蛤蟬貫と爲す。後、唐の玄宗、其の雅ならざるを鄙しみ、易へて歌樓格と作す」とある。また馮序には「玄宗手製の律譜」とあって、玄宗が供奉の者に勅して作成させたものとは述べていない。なお『彙纂元譜南曲九宮正始』は一九八四年八月、臺灣學生書局『善本戲曲叢刊』に収録されている(「徐子室南曲譜」が『彙纂元譜南曲九宮正始』であることと併せ、平塚順良君の教示)。

(8) 唐代、長安と洛陽の間にいくつかの行宮が設けられていた。「連昌」はそのひとつ。河南府壽安縣(現洛陽市宜陽縣)の「西二十九里に連昌宮有り。顯慶三年(六五八)置く」と『新唐書』地理志に見える。なお唐の元稹の「連昌宮詞」は、ここを舞台に玄宗時代のことを歌った作品として知られる。

(9) 「云謠集」は『雲謠集雜曲子』ともいう「敦煌遺書」の一つ。唐代の民間流行の曲子詞を収めた最古の詞集で原題には「三十首」所收とある。ロンドンの大英博物館所蔵はスタイン將來本(斯一四四一)で、十八首ある。ほかにパリ國民圖書館所蔵のペリオ將來本(伯二八三八)は十四首あり、合計は董康いうごとく「三十二闕」であるが、二首の重複を見、兩本あいまって原題數に合致する完本となる。朱祖謀は『疆邨叢書』に董康が大英博物館で抄録したものにに基づき収録し、『雲謠集雜曲子跋』に「雲謠集雜曲子は、敦煌石室舊藏の唐人寫卷子

本にして、今、英京博物館に歸す。毘陵の董授經、倫敦に遊び、手録して貽らる。……集中の脫句譌文、觸目して是あり。授經聞ま諛正する有れども、未だ盡くは疑ひを祛らず」という。

(10) 「胡舞習天魔」は、淫樂に耽った元の順帝が十六人の宮女にきらびやかな衣裳を着せ、象牙の佛冠を戴かせて舞わせた「天魔舞」(『元史』卷四三・順帝紀六)を指す。元の薩都刺『雁門集』卷三「上京卽事」詩其三に「十六天魔舞袖長し」とある。

(11) 「題」は、ものに書きつけること。「襟」は胸懷の意味。すなわち「題襟」とは情感を詩に書き留めること。晩唐の溫庭筠・段成式・徐知古の唱和詩集を『漢上題襟集』という。これに因んで、詩の唱和を「題襟」ともいう。

(12) 沈曾植(一八五〇〜一九二二)、字子培、別號は乙盦など多種。浙江嘉興の人。光緒六年(一八八〇)の進士。安徽提學使に任ぜられた光緒三十二年(一九〇六)、學務の考察のため日本に赴く。また、法律館纂修等の職にあった董康も同時期に來日し、司法調査を行っている。詩人としても著名。

二十七日

晴れ。村上(貞吉)が来て言うには、「東京」帝大は別途、講演料を送りたいとの由。余はそれを鄭重にお断りした。午後三時、學士院に行く。七時、景熙(おいの董俞。本卷十一月十九日條に既見)がお別れに来る。出發は明晩と決まる。長崎經由で歸るが、龔女士(龔玉徽)も同行、大谷も向かう。荷物に中國圓百五十元が残っているのを彼に託して上海にもって行かせる。文求堂(田中慶太郎)から舊都(北京)にいる傅沅叔(傅增湘)同輩の手紙を轉送して来る。あわせ『光嶽英華』一函四冊を送附。本書は、もと徐梧生(徐坊)の所蔵本であったが、後に彼の婿の某太史に歸した。以前、琉璃廠の書肆に

あつたが、それを郵送販賣したのである。言い値があまりにも高いので、買わなかったが、このたび沅叔を介して値段の折り合いがつき入手できた。大變うれしいことである。すぐに御禮の返書をしたためた。

光嶽英華十五卷

〔董康の解題〕

明洪武（一三六八〜九八）本。黒口、四圍雙邊。鐫刻古雅なり。「汝南後學許中麗中孚編輯、豫章揭軌孟同校正」と題す。前に洪武十九年（一三八六）丙寅正月望日の軌の序有り。次は目錄と爲す。卷一より卷三に至るまで唐、卷四より卷十に至るまで元、卷十一より卷十五に至るまで明。毎卷の下並びに「七言律詩卷之幾」と註す。宋・金を中略すること、序中に於いて約略之を言ふ。

並びに書題の上に於いて、冠するに「有唐」「有元」「皇明」等の字を以てするは、殊に創例と爲す。按ずるに、是の書は黃虞稷の『千頃堂書目』（卷三二）に見ゆ。卷帙同じきも、惟だ繋ぐに掲の名を以てするは、乃ち偶爾の失檢なり。『四庫提要』（卷一九一・集部四四・總集類存目一『殘本光嶽英華』）は浙江の天一閣（明の范欽の藏書閣）本に依り、錄して其の目を存す。竹垞（清の朱彝尊）『明詩綜』（卷二二・偶桓）に「明初の選政を操する者に許中麗有り云云」と稱するを引いて、推定して洪武中の人と爲す。是れ當時の進呈本並びに洪武の掲の序を失ふなり。又た錢牧齋（清の錢謙益）『列朝詩集』甲集前編卷十に『光嶽英華』の六人を收む。吳會【原注：（以下省略）七首】王翊【一首】游莊【二首】王中【十五首】陳安【三首】鐘廉【一首】と爲す。今、卷中に並びに

一人も無し。而るに目錄の第四葉、周啓に至り、戛然として止む。且つ掲の序に「歌行」有れども、卷中に之無し。是れ此の本之を叢殘に出づること、以て斷言す可し。又た甲集卷十八に『光嶽英華』の三體十二人を收む。甘瑾【四十首】張率【四首】掲軌【十六首】周啓【二首】劉秩【五首】元宣【二首】危進【二首】吳世忠【三首】朱弘祖【二首】余守約【二首】聶同文【二首】高伯恂【一首】と爲す。是の編の選ぶ所、『列朝詩集』と同じき者、僅かに元宣【五首】危進【七首】張率【十五首】掲軌【二十一首】吳世忠【六首】甘瑾【十五首】周啓【八首】の七人のみ。互いに相比較するに、溢出の詩及び人、頗る多し。且つ古體詩有り。是れ牧齋の見る所の本は乃ち足本なり。

〔掲軌の序〕

詩は漢・魏よりして下、唐より盛んなるは莫し。唐の後、元より盛んなるは莫し。是を以て君子焉を尙ぶ。開元（七一三〜七四一）・大曆（大曆、七六六〜七八〇）、諸賢繼起し、歌詞の風格は六朝の習を一掃す。皇慶（一一三二・三）・延祐（一一三四〜一一三二〇）、作者傑出し、悉く宋・金の風を變ず。歌詞爛然として、後の詩を言ふ者、此より越えざるなり。汝南の許仲孚は、雅より吟詠を好み、嘗て二代の詩を録し、其の作（法度）に合ふ者を取り、律詩・歌行に分かつこと、凡て若干首。之を梓に刻し、之に題して『光嶽英華』と曰ふ。其の編次の序を觀るに、有元を以て直ちに盛唐に接するは、其れ詩を知るかな。近世、襄城の楊伯謙（元の楊士弘）作りし『唐音』は、之を精ならずと謂ふ可からざるも、

其の備はるを求むれば、則ち未だしなり。荀人の宋褰著はす『朝風雅』は、亦た之を備はらざると謂ふ可からざるも、其の精を言へば、則ち未だしなり。若し夫れ其の音節を審かにし、其の體製を辨じ、精にして之を略に失はず、備はりて雜に傷はざるは、則ち仲孚の録する所に出でず。吾嘗て此に志すこと有るも、其の識の未だ博からざるを病みて能はざるなり。仲孚の若き者は、常情を度越すること遠きかな。嗟乎、王者の跡熄みて詩亡び、此に於いて以て世道の降るを見ること有るなり。邵子(宋の邵雍)に云へる有り、「刪(孔子による『詩經』刪定)より後、更に詩無し」(宋の楊時『龜山語錄』卷二所引)と。蓋し聖人の意を知るのみ。〔唐の〕王通氏は魏晉數百年の後に起こり、聖人の遺意を得て、慨然として詩に續くるに志すこと有るも、而れども卒に其の書の傳はるを見ず。蓋し復た「關雎」「麟趾(麟之趾)」の詠、「鳧鷖」「既醉」の音(いづれも『詩經』中の詩篇)の録す可き者有らざらん。風俗の趨愈いよ下り、聲文の變日びに靡ぶ。之が爲に深歎せざる能はざるなり。然り而うして乾坤の清氣の鍾まる所、山川の神秀の萃まる所、特起の才、未だ嘗て焉無くんばあらず。此れ則ち『光嶽英華』の由りて起こる所なり。仲孚、既に二代の詩を環翠亭に刻し、又た聖朝治世の音の其の善く鳴る者を采り、并せて之を刻し、以て後に續く。意謂へらく、皇家、人倫に厚く教化に美なること、將に此に於いてか徴せんと。仲孚は、其れ詩の教を爲す所以を知るかな。洪武十九年(一三八六)歲次丙寅、正月望日、豫章の掲軌序す。

〔傳增湘の識語〕

此れ汝南の許中麗の編する所と爲す。専ら唐・元・明三朝の七言律詩を選んで一集と爲す。凡そ十五卷。卷一より三に至るまで有唐と題す。卷四より十に至るまで大元と題す。卷十一より十五に至るまで皇明と題す。皆、二字を以て書名の上に冠す。下に「七言律詩卷之幾」と注す。各卷の首は「汝南許中麗仲孚編輯、豫章掲軌孟同校正」と題す。半葉十一行、行ごとに二十字。黒口、四周雙闌。鏤工古雅にして、字體は松雪を撫す(元初の趙孟頫の書體に模す)は、猶ほ是れ元板の風格のごとし。前に洪武十九年丙寅の掲軌の序有り。略に言ふ、「詩は唐より盛んなるは莫し。唐の後、元より盛んなるは莫し。開元・大歷の諸賢、六朝の習を一掃す。皇慶・延祐、作者悉く宋・金の風を變ず。仲孚、嘗て二代の詩を録し、其の作(法度)に合ふ者を取り、之を梓に刻し、題して『光嶽英華』と曰ふ。其の編次の序を觀るに、有元を以て直ちに盛唐に接すと云ふ」と。此れ其の選詩の大旨なり。序末に又た言ふ、「既に二代の詩を環翠亭に刻し、又た聖朝治世の音を采り、并せて之を後に刻す」と。是れ明詩は其の續選増入する所の者なり。夫れ元、明の間、唐詩を選ぶ者は衆し。元詩を選ぶ者は、『皇元風雅』『元詩體要』『元音』『乾坤清氣』『正聲類編』『大雅集』『元風雅』等の如き、亦た十數家を下らず。唐・元を合して一爐と爲し、七律の一體を専らとするが若きは、則ち斯の集實に創作と爲す。第だ録する所、祇だ杜少陵のみ専ら一卷と爲し、其の他は每人一、二首を選び、多きは七、八首を越えず。殊に其の

長ずる所を盡くすに足らず。元詩の六卷、凡そ百家を取る。其の人に頗る稀見の者有り。或いは秀野の元選（清の顧嗣立『元詩選』）の遺を補ふに足るのみ。此の集は始めて焦氏の『經籍志』（明の焦竑『國史經籍志』卷五）に見ゆ。黄氏の『千頃堂書目』も亦た之を載す。乾隆の時、詔を下して書を徵し、浙江會て採りて以て進め、遂に附して『四庫全書總目』の存目に入る。惟だ焦・黄の二目は、題して「揭軌撰」に作る。四庫館見る所は、天一閣の鈔本爲り。其の祇だ七律の一體のみ有るを以て、疑ひて佚と爲し、竟に題して殘本に作る。許中麗の籍貫・年代に於いて、均しく未だ詳悉せず。蓋し咸^みな未だ原刻を見るを得ざりしならん。而して傳鈔の者又た其の序目を失ひ、故に詞多く恟怛たるなり。書は洪武より以後、再刻を聞かず。徧く近代の藏書目錄を検するに、亦た未だ其の名を著はさず。流傳の罕なること知る可し。此の本に「安樂堂」「明善堂」の二印有りて、舊^もと怡王（康熙帝の子、怡親王允祥）の邸中に藏せらる。近時、福山の王文敏（王懿榮）の家に入る^⑤。其の書は佳選に非ず、楮墨も亦た未だ初印と爲さずと雖も、然れども洪武より今に迄^{いた}るまで已に五百五十年、名輩の珍儲を歷經して、卷帙完整なり。昔人の未だ見ざる所にして、亦た竝世の傳はらざる所と爲す。寧^{なん}ぞ之を奇祕と謂はざらんや。誦芬同年（董康）は夙に元人の集を嗜^{この}む。余爲に訪ねて盧氏の太史（徐坊の長壻で翰林院編修であつた河南盧氏の人、史寶安）の家に得たり。爲に其の原委を攷へ、詳かに編に著はす。且つ余方^{まさ}に『乾坤清氣』の解題を撰せんとし、此の書を見るを得たり。正に

佳對と爲すに堪ふるなり。孟同は籍を臨川に著はす。當に文安（元の揭傒斯）の族人爲るべし。洪武の初、明經に擧げられ、新河縣に知たり。秩滿ちて歸省し、郡西の茅峰下に居る。杏花春雨亭を築き、生徒に教授す。二十五年、命ぜられて江西の主考官と爲る。明年、召されて京に入り、『書傳會選』を校定す。宿儒を以て嘗て顧問を被むり、書成りて歸らんことを乞ふ。此の集、蓋し家に居り徒に授けし時に校刻する所ならん。辛未（一九三一）仲冬、藏園識^{しよ}す。

(1) 傳增湘（一八七二—一九四九）、字沅叔、四川江安（四川省宜賓市江安縣）の人、藏園と號した。董康と同じく光緒二十四年戊戌（一八九八）の進士（同年の進士は互いに「同年」と呼び、交友厚かつたという。なお原文「同年」を「同輩」と譯した）。清朝政府以來、教育行政に攜わり、中華民國政府においても民國六年（一九一七）から八年まで教育總長（文科大臣）の任に當つた。近代の大藏書家の一人として有名で、宋・元版二種の『資治通鑑』を藏したことから、藏書室を「雙鑑樓」と名づけた。民國十八年（一九二九、昭和四年）には、日本に訪書の旅行を行った。藏書の多くは逝去の二年前および没後に北京圖書館（現國家圖書館）に捐藏された。『雙鑑樓善本書目』など生前の編著も少なくないが、近年、孫の傳熹年氏が遺稿等を整理編修した『藏園羣書經眼錄』（一九八三年九月、中華書局）、『藏園羣書題記』（一九八九年六月、上海古籍出版社）、『藏園訂補邵亭知見傳本書目』（一九九三年六月、中華書局）が出版されている。

(2) 董康所藏本の現藏は未詳。『中國古籍善本書目』卷二七（集部、一九八八年三月、上海古籍出版社）には、本書の十五卷本の足本として、北京圖書館藏本の明洪武十九年刻遞修本と清鈔本の二部のみ著録する。『四庫全書存目叢書』に北京圖書館藏清鈔本が影印されたが、これは

清の王士禛刪定本の十三卷本(唐詩の三卷を刪去した本。ただし王士禛の序には十二卷とある)である。「中國古籍善本書目」の清鈔本の記述に誤りがあるのであろうか。なお董康の所藏に歸したこの本の記録が『藏園羣書經眼錄』卷十七にあり、また本文の後に附す傳增湘の「識語」が『藏園羣書題記』卷十八に「明本光嶽英華詩集」として収録されている(些か文字を修改して「戊寅中秋日」の日附を文末に記す)。

(3) 徐坊(一八六四〜一九一六)、字士言、號梧生、山東臨清直隸州(山東省臨清市)の人。戶部江南司主事、京師圖書館副監督などに任ぜられる。藏書室を歸朴堂という。藏書は、没後に一部流出したが、未亡人の死後、散じ盡くした。北京の邸宅の藏書は分かれて、子と長婿の史寶安(翰林院編修)別稱を「太史」という―であった)の所有に歸した(王紹曾・沙嘉孫「山東藏書家史略」、一九九二年一二月、山東大學出版社による)。

(4) 『藏園羣書題記』によると、「安樂堂藏書記」「明善堂覽書畫記」という印文の二印である(前者の印影は一九八八年六月、國立中央圖書館「善本藏書印章選粹」に見える)。

(5) 王懿榮の舊藏であることは、『藏園羣書題記』に録された「王懿榮」海上精舍藏本「福山王氏正孺藏書」「顯處視月」の藏書印で判明する。

二十八日

晴れ。奥平昌洪まさひろが著わした錢譜①の序文を誦う。譜に貼られた錢影は、どれもこの國の著名な珍品ぞろいで、壯觀というべきである。體例も行き届いている。さらに日本古錢收藏家小傳も附録している。現在、講演の準備中で、執筆の暇がないので、返却した。楊鼎甫が來たり、守和の書函を取り出す。彼は用事に煩わされ、東航できないことが分かった。數枚の目錄を同封して、印行すべき書籍の鑑定を託す。そこ

で長澤(規矩也)・田中(慶太郎)を呼び迎え、一緒に選び出した。圖書寮のものとしては、『玉堂類稿』『宋景文集』『王文公集』『太平寰宇記』【原注：(以下省略)】ともに宋本)、【金臺集】【元本】、【羣書治要】【古鈔本】の七種。^② 靜嘉堂のものとしては、『吳志』『王右丞集』【ともに宋版】の二種。^③ みな人寰の孤本である。午後四時、瀧川博士(瀧川政次郎)來たる。この國の法務官任用について質問する。はじめに國家試験があつて、手順はだいたい我が國と同様である。試験に合格すると、試補の名稱が與えられ、年俸は千圓。裁判所に配屬され、判事・檢事の仕事を各一年勤める。司法當局は審判・調査の成績のほか、人格と家柄を重視する。再試験の合格者は十人中五人である。それゆえに風紀は嚴格で、賄賂不正の弊害がない。この日、狂風が吹き荒れ、寒さが俄に増す。

再贈平尾聚泉

再び平尾聚泉に贈る

泉刀銖兩足生涯

泉刀銖兩 生涯おほに足し

氈蠟⑤頻年燦墨華

氈蠟 頻年 墨華あざや燦かなり

今日墨隄傳韻事

今日 墨隄 韻事を傳ふ

範金吉語補新家

範金の吉語 新家を補ふ

再び平尾聚泉に贈る

生涯かけて夥しい古錢を収集された。また何年も續けて、墨色あざやかな錢貨の拓本も採っておられる。隅田川流れる東京に住むあなたは、この文人趣味を今日に受け繼がれた。古錢に鑄込まれた目出度い言葉は、新しい家の喜びを増すであろう。

(1) この「錢譜」とは、のち昭和十三年六月に岩波書店から稿本影印本として出版された『東亞錢志』十八巻を指すであろう(補遺二巻は昭和四十四年影印。昭和四十九年九月の歴史圖書社から再影印された二十巻五冊本がある)。

(2) 『玉堂類稿』『宋景文集』については、本書卷三・三月三日條に「崔舍人玉堂類稿二十巻附録一卷西垣類稿二巻」景文宋公文集十八巻」として、『王文公文集』『太平寰宇記』は、七日條に「王文公文集七十巻」「太平寰宇記二十五冊」として、『金臺集』は十四日條に「金臺集一卷」として、『羣書治要』は十五日條に「羣書治要四十七巻」として董康の觀書記を載せる(平成十一年十二月、「就實語文」第二〇号、拙稿「董康『書舶庸譚』譯注補訂」参照)。ちなみに最近になって、『玉堂類稿』は「日本宮内廳書陵部藏宋元版漢籍影印叢書」第二輯に影印された(二〇〇三年五月、綫裝書局)。また『王文公文集』は、龍舒本『王文公文集』の影印(一九六二年、中華書局)の際、補配に一部分が用いられた。『太平寰宇記』は二〇〇〇年一月に中華書局から影印された。『羣書治要』は、昭和十六年に宮内省圖書寮から影印された(軸裝。一九八九年から九一年「古典研究會叢書」漢籍之部第九・一五巻、汲古書院再覆製あり)。

(3) 『吳志』については、董康觀書記が本書卷六・十二月十日條に、また『王右丞集』は卷八下・乙亥(民國二十四年、昭和十年)五月七日條に見える。なお『吳志』すなわち『三國志』の『吳書』の靜嘉堂文庫本は「古典研究會叢書」漢籍之部第六卷(一九八八年一月、汲古書院)に影印、『王右丞集』は同じく第三二卷(二〇〇五年九月)に影印された(先だつ一九七七年七月、靜嘉堂稀觀書七の影印本もあり)。

(4) 「泉」は中國古代の貨幣、錢に同じ。「刀」は刀の形をした青銅製の貨幣、主に戰國時代の齊・燕・趙に行われた。「銖」「兩」は重量の單位、二十四銖で一兩(先秦・前漢で約一六グラム)に相當するが、ここでは「銖」は五銖錢(漢の武帝の代に始めて鑄せられ、唐初まで續く)、「兩」は半兩錢(秦の始皇帝に始まり統一貨幣とされ、漢初にも行われる)を指すであろう。あわせて古代の錢貨をいう。

(5) 「氈」は濕拓に用いる打包(たんぼ)の用材、「蠟」は乾拓に使う蠟墨。轉じて「氈蠟」をもって拓本の意味となる。清の王澐『竹雲題跋』卷二に「氈蠟の法、宋時最も精なり。」という。

二十九日

晴れ。上海の趙晉卿の書函を受け取る。工部局の何徳全(未詳)の手紙が同封。英國人のジョーンズに代わって今回の講演録の華文・日文それぞれの原稿を請う。原稿は仁井田の翻譯である。村上君にこのことを相談すると、翻譯を許してくれて全て上海に郵送した。

三十日

晴れ。午後三時、學士會館に行き講演。某新聞を見て、司法部の樞要官・專任官が外交上のことで辭職と知る。その新聞には、また某銀行の破産の記事を載せる。⁽¹⁾これは時局の影響をうけたものであり、かねて承知の事情ではあるが、この情報が確實でないことが願わしい。全國の金融に連動しないよう望まれる。夕方、田中を訪れ懇談する。机邊に琉璃廠の本屋から送付された明人の著作四種があった【原注：目錄後掲】。妥善な値段で攜え歸る。夜になって雨。

四不如類抄九卷⁽²⁾

錢一本の撰。一本、字は國瑞、吾が邑(江蘇省常州市武進)の人。萬曆十一年(一五八三)の進士。知縣より徴せられて御史を授けられ、太僕寺少卿を贈らる。事蹟は『明史』(卷二三一)本傳に詳し。是の抄、前に自序【原注：(以下略)癸丑長至日】・于■

■(二字墨丁)の題辭、末葉を失す、史孟麟の引首【萬曆癸丑(萬曆四十一年、一六一三)季冬】、吳亮の序【昭陽赤奮(若)(癸丑)】有り。「四不如」とは、一不如「異類」。上卷「德性」「孝慈」「忠義」「別序」「樂羣」の五類と爲し、中卷「靈頓」「性命」「感應」「禪玄」の四類と爲し、下卷「記言」と爲す。二不如「賤類」。上卷「僕隸」「妾婢」の二類と爲し、中卷「倡優」「乞盜」の二類と爲し、下卷「記言」と爲す。三不如「婦寺」。上卷「婦忠」「婦孝」「婦節」の三類と爲し、中卷「婦義」「寺人(宦官)」の二類と爲し、下卷「記言」と爲す。四不如「夷狄」。上卷「尊華」「用華」の二類と爲し、中卷「變夷」「雜種」の二類と爲し、下卷「記言」と爲す。「記言」とは、傳記及び雜文を彙集するの屬なり。每類の後、之に繋ぐに論を以てす。卷末に復た自序並びに韻語七行有り。本傳を考ふるに、其の「論相」「建儲」の二疏を載せ、懸直を以て帝の衝む所と爲る。給事中の孟養浩を杖するに於いて、中旨もて斥けられて民と爲り、歸りて東林の講席を主る。此の抄は、里居して作る所にして、以て其の牢騷伊鬱を寄するのみ。多く子・史より採ると雖も、事毎に、詳しく顛末を載せ、尙ほ他の類書の割裂釘鉅(斷片の寄せ集め)の弊無し。

玄羽外編六種³⁾

張大齡撰。大齡、號は玄羽逸史、四川眉山の人。是の編、前に「晉唐指掌」、萬曆辛丑(二十九年、一六〇二)の題首有り。六種。一は「史論」四卷と爲し、二は「說史簡言」十卷と爲し、毎に一目を立て、而して以て史相同じきの事實を列し之を隸す。三は

「晉五胡指掌」六卷と爲す。前に「總論」二篇有り。卷一「羯石氏」、卷二「鮮卑慕容氏」、卷三「氏苻氏」、卷四「索虜拓拔氏」、卷五「羌余氏・前涼張氏」、卷六「西涼李氏」。四は「唐藩鎮指掌」六卷と爲す。卷一「盧龍・盛德二鎮」、前に「總論」三篇有り。卷二「魏博・澤潞・平盧・朔方」の四鎮、卷三「河東・隴右・河西」【原注：(以下略)二鎮を一篇と爲す】・邠寧・涇原・鳳翔」の六鎮、卷四「荊南・山南東道・河中・河南・淮南」の五鎮、卷五「淮西・劍南・興元」の三鎮及び晉王・梁王、卷六「趙王・吳王・齊王を附けたり」・蜀王・吳越王・閩王・岐王・燕王・楚王・鄴王・渤海王・越王」。五は「隨筆」八卷と爲す。六は「支離漫語」三卷と爲す。眉山は、宋より以來、文士輩出す。李燾・彭百川の如きは、尤も史學を以て著名なり。玄羽、識見宏通、徵引淵雅にして、先輩の流風の遠きを見るに足る。『千頃堂書目』史部別史類を考ふるに、僅かに「五胡」「藩鎮」の二種を載するのみ。而して「藩鎮」は祇だ一卷のみ。又た別に「晉唐指掌」四卷を出だす。今、「題首」を讀むに、即ち「五胡」「藩鎮」の二種を包擧す。即ち亦た二種の自序なり。殆ど著録の時、未だ詳審を加へざるなり。

翠樓集一卷二集一卷新集一卷⁴⁾

〔董康の解題〕

「淮南の劉云份、字平勝輯【原注：號青少】」と題す。前に自序有り。每集、冠するに族里を以てす。四庫は錄して存目に入れ、卷帙同じ。『靜志居詩話』、明人選する閩秀詩を徵引し、「云」を誤

りて「之」に作る。惟だ是の編は、兪憲『淑秀集』の前に列す。其の人、當に萬曆以上に屬すべし。存目は系ぐに國朝を以てするは、殊に失檢と爲す。錄する所は皆金屋の名姝を以て、玉臺の麗句を寫す。其の題名の義を釋するに、卽ち其の宗旨の在る所を知る。

〔劉云份の序〕

夫の歌詠の興を原ぬるに、宮壺に興り、辭華の艶は、釵鬟に艶なり。列國之に因りて風（『詩經』の十五國の民謠「國風」）有り、尼山（孔子）是を用つて戒を垂る（鄭・衛の二國の歌は淫靡類廢の風あると批判した）。秦・漢より還、何れの代か有ること蔑からん。昭明の選（梁の昭明太子、蕭統編『文選』）は、聲韻を瓊裾に遺れず、『玉臺』（陳の徐陵編『玉臺新詠』）の一編は、純ら藻思を彤管に借る。香籟・宮體（いずれも艶體の詩風）、唐宋の人此を擅にして家に名あり。淫蕩の言無からずと雖も、然れども下世冥頑、士人鹵莽、未だ必ずしも性情の鍼砭に非ずんばあらず。有明三百年の間、閨閣の琅函（女性の美しい文學作品）、幾ど瀚海を成す。之を讀むに人の心をして動かさしむる者有り。因りて輯めて一書と爲し、名づけて翠樓集と曰ふ。正に其の春日に妝を凝らし（唐の王昌齡「閨怨」前半に「閨中少婦 愁ひを知らず、春日 妝を凝らし翠樓に上る」とある）、新愁解けざるを想ふに、誰か與に傳へんや。是の編を握る者、寧ろ溫柔郷（人を惑わす女性美の世界）に老死せんか。抑も直ちに侯に封ぜられんとして（王昌齡「閨怨」後半に「忽ち見る 陌頭 楊柳の色、悔ゆらくは夫

婿をして侯に封ぜられんことを覺めしむるを」とある）沙場に臥し（唐の王翰「涼州詞」に「醉うて沙上に臥す 君笑ふこと莫かれ」とある）、而して兒女子の態を作さざらんか（唐の韓愈「北極贈李觀」に「爲す無かれ 兒女の態」とある）。淮南の劉云份序す。品花箋四十三種

〔董康の解題〕

清吾花史の輯。前に小引並びに圖■葉、甚だ精美なる有り。凡そ四類に分かつ。一は「名姬品第」、書を引くこと九種。二は「名姬藻飾」、書を引くこと十種。三は「名花譜系」、書を引くこと十種。四は「名花燕賞」、書を引くこと十二種。青蓮の詩に云ふ、「名花傾國 兩つながら相權ぶ」（李白「清平調」其三の起句）と。花か人か、其の風懷の旖旎たるを寫すに非ざる無きのみ。

〔清吾花史の題記〕

昔より名花は妃子に比ぶ。而して芍藥は沈香の恨みを釋き（李白「清平調」の轉結二句に「解釋す 春風無限の恨みを。沈香亭北 欄干に倚る」とある）、海棠は春睡の名を留む（宋の樂史「楊貴妃外傳」に「明皇、妃子を召す。方に酔ひて來る。帝曰く、乃ち是れ海棠睡り未だ足らざるのみ、と」とある）。瓶裏の一枝は、寵せらるること金屋の如し。苑中の百朶は、共に藥珠を出だす。故に毎に紅粉に對して、飄零を惜しみ、未だ嘗て薜華を歎きて青草に傷まずんばあらざるなり。近代の楊太史（明の楊慎）・曹學士（明の曹大章）・潘髻公（明の潘之恆）、皆人倫の騷雅にして、風流の主盟なり。左に花の如きの姝を擁し、右に夢彩の筆を搖る

がす。名花傾國、兩つながら故より相懼び、夕秀朝華、一に唯だ品する所のままなり。此を以て詞は拱壁を争ひ、字は兼金を軼ほしままにす。『北里』『教坊』をして獨り佳話を傳へしむるのみならず、遂に秦樓(美人秦氏が居た樓、樂府「陌上桑」に見えるが、これは南京の秦淮の花街を指す)・蜀館(四川成都の妓館)を將もつて艶を名都に竝ぶ。且つ姫を品して藻飾に及ぶは、情の魂夢に來り、別後の怨歌、此の一木の衷粉鬪體を解せざると謂はんが若し。花を品して燕賞に及ぶは、紫絲(芍藥の品種)白鼻、絃索鼎彝、一村の鄙窮措大(失意貧窮の寒士)には非ざると謂はんが若し(且つ姫以下、文意未詳)。是に于いて既に逸事小名を表はし、復た琴罇おんぼたん權具を次す。風光を點綴して、益ます神韻おんぼたん滋し。茲の集や、才情の餘事と雖も、抑も亦た風雅に備ふ可きの逸編と云ふ。清苔花史題す。

〔引書目録〕

〔名姫品第〕

金陵麗人記(未詳)

秦淮士女表(明の曹大章撰。大章は、氷華梅史と號し、嘉靖の進士、翰林院編修、『曹太史含齋集』がある。『說郭續』卷四四にも『秦淮士女表』を收む)

曲中志(一卷。明の潘之恆の撰。之恆は嘉靖間、中書舍人となる。

本書また『說郭續』卷四四所收)

吳姬錄(未詳)

燕都妓品(明の曹大章撰。また『說郭續』卷四四所收)

江花品藻(一卷。明の楊慎撰。また『欣賞編』第二〇册所收) 北里志(一卷。唐の孫棨撰)

青樓集(一卷。雪蓑釣隱輯と題す。元代の女伶について記す) 教坊記(一卷。唐の崔令欽撰)

〔名姫藻飾〕

巫山夢(『合刻三志』所收の「巫山神女夢」と同じか)

湘中怨(唐の沈亞之「湘中怨解(辭・詞)」)

溫柔鄉(未詳)

錦字書(明の黃峨撰。『綠窗女史』にも收む)

青樓(未詳)

唾珠(未詳)

十索(隋の丁六娘の撰。『綠窗女史』にも收む)

粧樓記(一卷。南唐の張泌撰。また『龍威秘書』四集等所收)

小名錄(『侍兒小名錄』一卷。宋の張邦幾撰。また宋の洪适撰。

『百川學海』『說郭』等所收あり)

吳箋譜(未詳)

蜀錦譜(一卷。元の費著撰。四庫全書著錄)

〔名花譜系〕

牡丹志(四庫全書著錄の撰者未詳『亳州牡丹志』一卷か)

芍藥譜(四庫全書著錄の宋の王觀『揚州芍藥譜』一卷か)

海棠譜(四庫全書著錄の宋の陳思『海棠譜』三卷か)

梅譜(四庫全書には宋の范成大『范村梅譜』一卷のほか、『華光梅譜』一卷がある)

蘭譜（四庫全書には宋の王貴學『蘭譜』一巻のほか、宋の趙時庚『金漳蘭譜』三巻がある）

菊譜（四庫全書には宋の劉蒙『劉氏菊譜』のほか、宋の史正史

『史氏菊譜』一巻を著録する）

花小名（明の程羽文撰。『說郛續』巻四〇所收）

花瑣事（明の薛素撰。『綠窗女史』にも收む）

花曆（明の程羽文撰。『說郛續』巻四〇所收）

花志（未詳）

花疏（明の王世懋撰。『學圃雜疏』の別名）

瓶花志（未詳）

「名花燕賞」

羯鼓錄（一巻。唐の南卓撰）

吹笛記（未詳）

絃子記（唐の柳宗元撰とされる。『重訂欣賞編』にも收む）

歌者記（唐の沈亞之「歌者葉記」か）

觴政（一巻。明の袁宏道撰。四庫全書著録）

茶疏（一巻。明の許次紆撰。四庫全書著録）

香箋（明の屠隆の「香箋」か）

琴箋（宋の崔遵度の「琴箋」か）

畫舫約（明の汪汝謙撰。『說郛續』巻二八所收）

古奇器錄（一巻。明の陸深撰。四庫全書著録）

錦帶書（梁の昭明太子蕭統撰というものが『說郛』巻七六にも收録される）

明月篇（明の王穉登撰。また『說郛續』巻二四所收）

(1) 札幌地方裁判所などの判事・裁判所雇の六名の檢舉事件が起こっていたが、當月二十九日になって、たとえば「東京日日新聞」では「また司法部に不祥事 判事、赤化運動に暗躍」という見出しで號外を出し報じている。董康が「外交問題で辭任（原文「已將外交辭去」）としたのは、政治的な配慮からであろう。なお、「某銀行の破産」の記事については未詳。

(2) 『國立中央圖書館善本書目』子部雜家類・雜纂之屬には萬曆癸丑（四十一年）刊本二部を「明の艾庵居士撰」として著録しており、『北京圖書館古籍善本書目』子部雜家類・雜纂は「明の吳亮輯」として明萬曆四十一年自刻本十二巻を著録する。

(3) 『四庫存目叢書』史部二八七に北京圖書館所藏の萬曆三十九年張養正刊本を收める。

(4) 『四庫存目叢書』集部三九五に首都圖書館所藏清康熙野香堂刻本を收める。

(5) 『國立中央圖書館善本書目』子部雜家類雜纂之屬に「品花箋四十三巻八册 明清苕花史編 明末煊秀閣刊本 附圖」と著録する藏本がある。